中国・四国経済特集

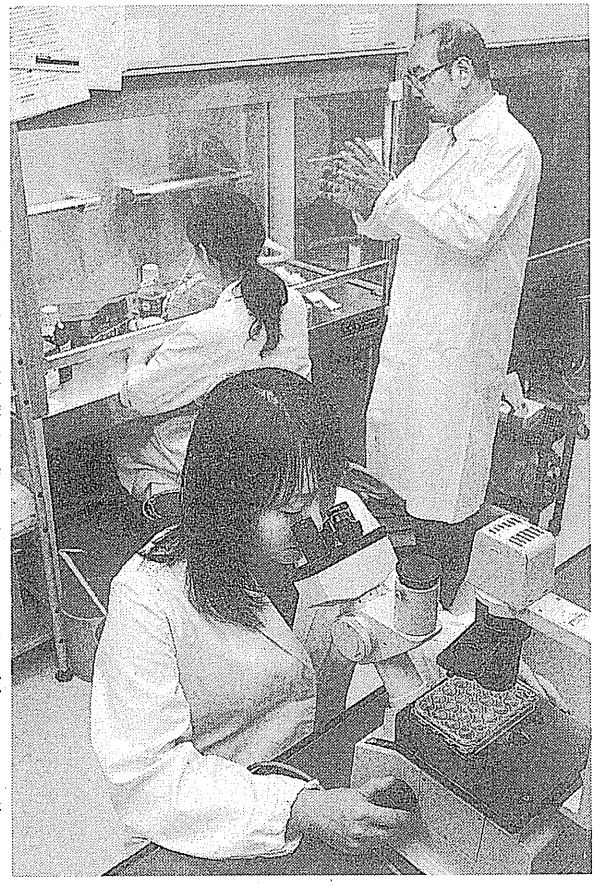
技術・知恵の商品力

先進医療拠点 整備進む

バイオ・遠隔診断 脚光

医療技術や医療サービスの分野でも、中四国地方で各地のノウハウを結集した先進的な取り組みが相次いでいる。

鳥取県と科学技術振興機構（JST）は、地域産学官共同研究拠点として、鳥取大学米子キャンパス（鳥取県米子市）に「とっとりバイオフロンティア」を来年4月にオープンする。医学部の押村光雄教授が開発したベクター（遺伝子の運び役）の作製技術を新薬開発などに応用するのが狙いで、バイオ産業集積の呼び水にしたい考えだ。



写真右はヒトの肝臓と同じ薬物代謝機能を持つモデルマウス。同左はマウスの研究を進める押村鳥取大教授（鳥取県米子市の鳥取大）

押村教授が開発したベクターは、従来のベクターでは大きすぎて運べなかったヒトの遺伝子も運べるのが特徴。ヒトの肝臓の遺伝子をマウスに組み込めば、新薬開発で有望物質を絞り込む場合にマウス実験でヒトへの薬効や副作用を予測でき、開発期間の短縮やコスト削減につながるという。

バイオフロンティアは鉄骨3階建てで、延べ床面積約1260平方メートル。押村教授の研究室が入居するほか、入居企業向けの貸研究室などで構成する。県が約5億7000万円をかけて建設し、JSTが約9億円を投じて研究設備の整備や施設改修などを行う。8月中に着工する予定だ。

「この症状なら○○病院の△△先生がいいでしょう」――。医療サービスの分野では、香川県発の遠隔地医療ネットワーク「K－MIX」が広がっている。

病院や診療所をインターネットで結び、患者のデータのやりとりを容易にすることで、患者や主治医はネットワーク内から最適な医療機関や医者を選んだり紹介したりできる。

離島など過疎地に暮らしていても、普段の掛かり付け医の診断を基に、より専門的な治療に必要な施設がすぐに検索でき、本当に必要なときにだけ通院する。しかもカルテなど患者の基本情報もやりとりできるため、検査の重複を避けることができる。

香川県医師会が運営し、県内外の約100の医療機関が参加。K－MIXが広がった理由はインターネットを使ったオープン系のシステムを採用したことだ。参加する医療機関は毎月6500円を払うだけで済み、他県の医療機関や医療関連事業者も参加できる素地が整っている。

将来は、治験のための臨床データや電子処方せんを製薬会社に提供することも企画。連携の幅は一層の広がりを見せている。

海外からの注目も集める。8月中旬にはタイの政府関係者がK－MIXの視察に訪れる。少子高齢化が進む国内だけでなく健康志向が強まる新興国などでも効率的な医療サービス網の構築は大きな課題。香川発の試みが世界に広がる日が来るかもしれない。